

谷戸 多拠点 居住論

縮減する横須賀谷戸地域における
拠点建築の提案

近年、シェアリングエコノミーの普及によって「多拠点居住」という流動的なライフスタイルへの関心が高まっている。そこで私は、地形的要因によって買い物難民などを多く抱える横須賀見遠地域に多拠点居住の拠点を提案する。郡心で日常生活を送る多拠点居住者と、様々な問題を抱えた地方生活者の生活が重なる接点をデザインすることで、互いの不足を補い合うこれらのライフスタイルについて考える。

見遠地域は、買い物難民・住人の集い場の不足・魅力発信の不足という大きく3つの問題を抱えている。そこで、郡心で日常生活を送る創作家・働いた若者・子育てファミリーという郊外地域に属する3者のターゲットを特定し、歴史的多拠点居住とその拠点プログラムを組み立て、地域住民と多拠点居住者の双方にメリットを生み、現地に相応しい新たな拠点プログラムを導き出した。

また、見遠の地形を3つに分類し特徴を整理することで、3つの拠点建築の計画地及び縦軸緑の構成を計画した。これにより、近隣住民の足を支え、皆が使えるインフラ建築として土壌に根づく建築を目指した。

多拠点居住者の助けにより、多中心的に町に展開される新たな拠点コミュニティは、谷戸地域特有のレイズ的なあり方に一石を投じると同時に、町に散在する密着家の価値を高め、見遠の賑わいを回復する大きな契機となることを目指す。

© 2018 YAMAGUCHI KENJI. ALL RIGHTS RESERVED.

全体計画

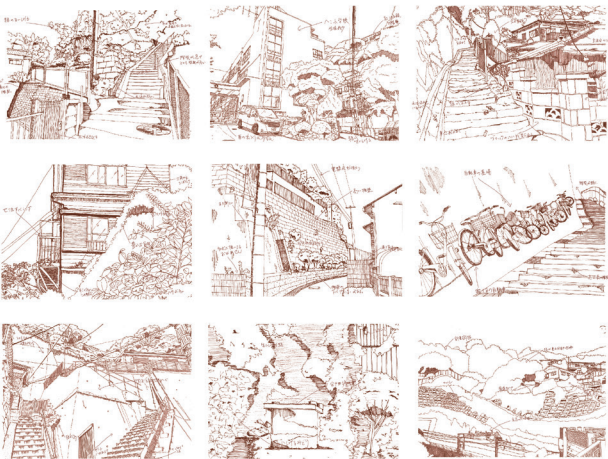
—— 3つの拠点を起点とした新たな谷戸ネットワークの構築 ——

三つの拠点が町に展開して行くことで現在散在している空き家は徐々にその地形と、拠点との位置関係から個性を持ち始め、郡心から人々が訪れやすい環境となる。多拠点居住という新たなライフスタイルが住民の賑わいを取り戻すことを願う。



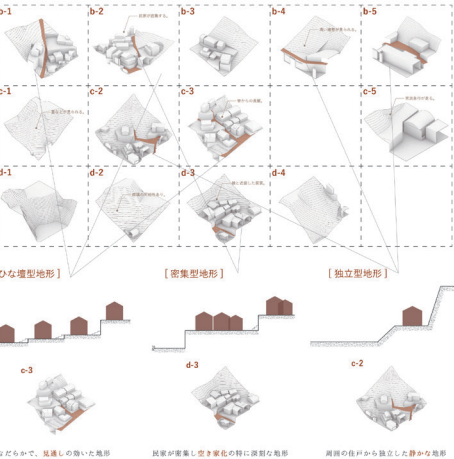
見遠調査

—— 見遠の地形的特徴と風景をスケッチ ——



見遠調査

—— 見遠地域のグリッド分割・モデル化により地形タイプを整理 ——

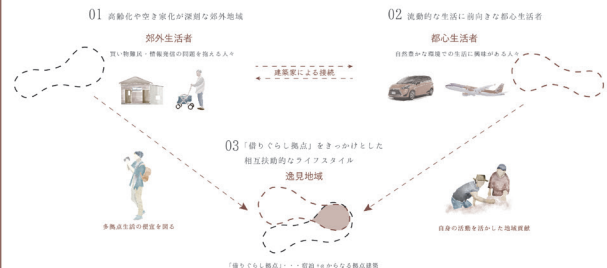


ヒアリング調査によって、見遠の抱える問題の多くは地形的な要因によるものであることが分かった。そこで次に、見遠地域をグリッド分割しそれぞれをモデリングと周辺スケッチにより特徴を整理することで見遠の地形を大きく3つに分類した。本計画では、3つの拠点をそれぞれふさわしいタイプの地形を選択し、計画敷地とした。



背景目的

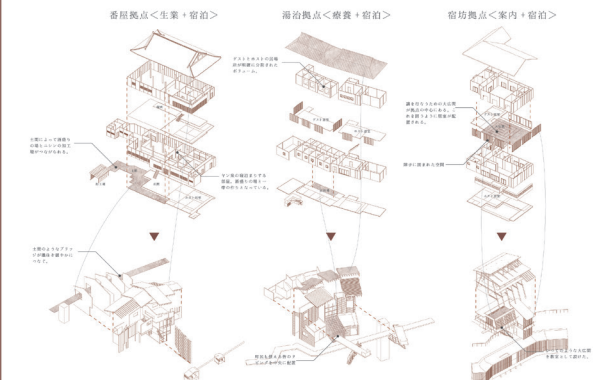
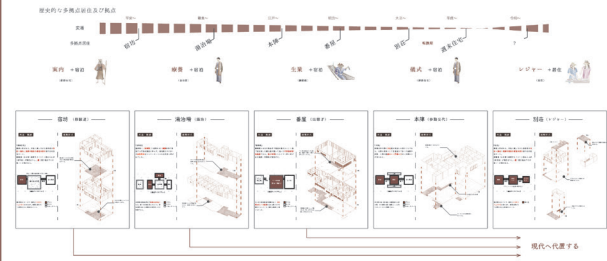
—— 2つの生活が重なる接点のデザイン ——



近年日本では地方都市の人口流出が深刻な問題となっており、2018年の国土交通省の調査によれば、5万人未満市町村の25.2%が地方移住を推進している。一方で、郡心においてはシェアリングエコノミーの普及や民泊新法の制定によって流動的な生活に興味を持つ人が増えている。こうした両者の共存による相互扶助としてのライフスタイルについて考える。本提案では、縮減地域である横須賀見遠に宿坊機能に付加機能を加えた3つの「借りぐらし拠点建築」を提案し、その可能性について示唆を得ることを目的とする。

手法

—— 歴史的拠点建築からヒントを得る ——



借りぐらし拠点は、平安時代以降に多拠点居住生活者のために作られた「宿泊+α」からなる拠点の事である。近代以降、欧州の別荘文化が日本に入ると、こうした借りぐらし拠点は、地域と来街者の接点として密な関係性を作り出してきた。本提案では、これらの歴史的な拠点建築を現代に代置することによって、持続的に相互の関係性を築く現代にふさわしい借りぐらし拠点を提案する。



番屋
拠点

「生業 × 買い物」

西逸見町管理

4 零細化・並列するヴォリューム

かつての番屋のように零細化された居室を土間に繋ぐような形式によって平面デザインする



K2階平面図 S=1:100

1階平面図 S=1:200

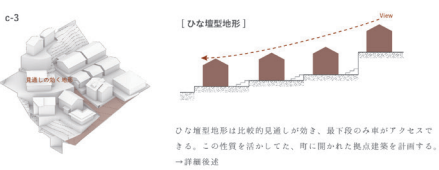
1 創作の場 × 買い物難民問題解決

両者の関わるきっかけを見つけ、建築化することで両者の目的を満たす拠点とする



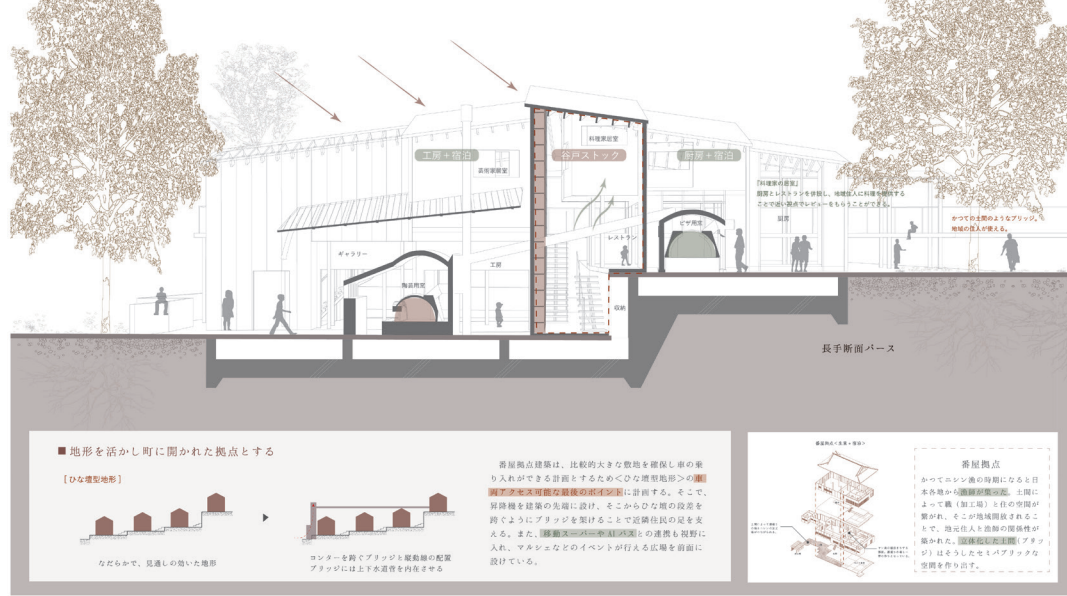
2 独立型地形に順応した計画

地形の性質を活かし、地域住人のアクセシビリティ向上に寄与する計画を考える



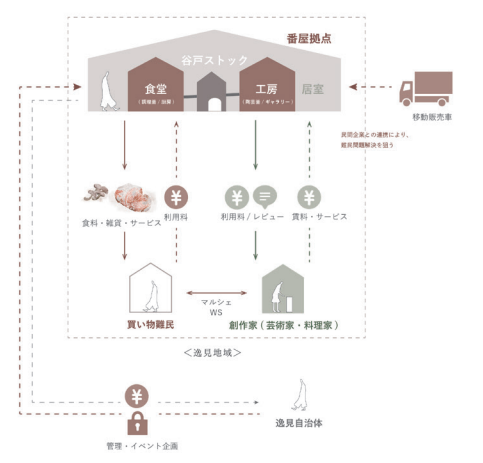
5 ひな壇型地形に答える「跨ぐ建築」

地形の性質を活かし、地域住人のアクセシビリティ向上に寄与する計画を考える



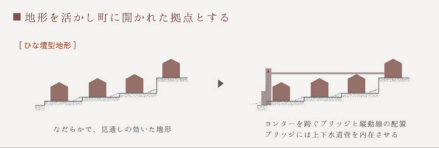
3 「谷戸ストック」を中心とした拠点運営スキーム

食堂・工房・谷戸ストックからなる拠点建築が地域住民を守り、町に活気を与える、起爆剤となる



多拠点居住者が食材を多く仕入れ、余剰分を買い物難民へ

番屋とは鎌倉の時代に全国から漁師たちが集った、加工場兼宿泊拠点のことである。この拠点ではそのく生業・宿泊の形式を踏襲し、**地元町内会が所有する空き家を活用して計画した**。多拠点居住者が自身の創作活動に追いつき、町民の不足を補い、さらには町の賑わいの起点となるような様々な**イベントを自発的に実施して行う**これにより、都心では得られない経験を得ながら地域に馴染んでいくことができる。

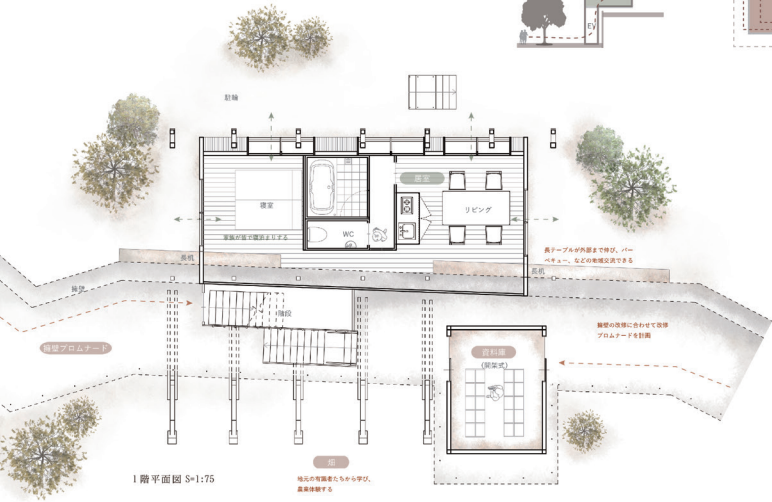




4 コンターを跨ぐ大広間

かつての宿坊のように大広間を中心とした形式によって平面デザインする

「教区（館）+ 居室」からなる拠点である。既存の空き家を間引きながら教区を計画し、前面に地形を活かした館を計画する。



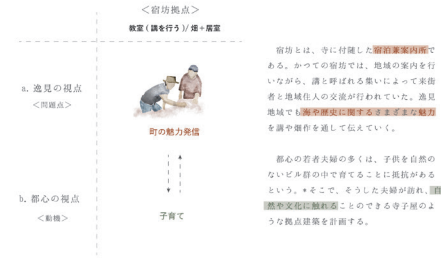
■外部と繋ぐ長テラス

隣壁に付随した長テラスによって外部と内部が繋がる。これにより地域の住人と食を介した交流の拠点となる。



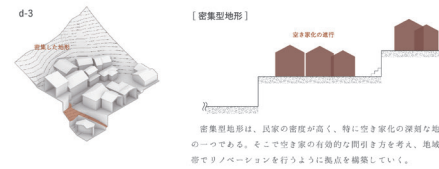
1 子育ての場 × 魅力発信不足問題解決

両者の関わるきっかけを見つけ、建築化することで両者の目的を満たす拠点とする



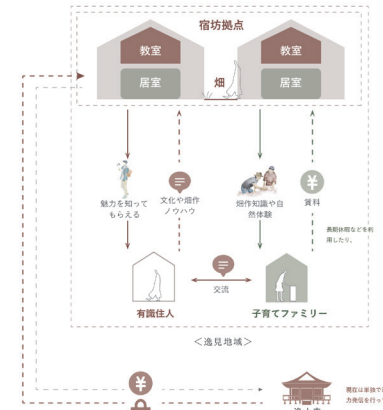
2 密集型地形に順応した計画

地形の性質を活かし、地域住民のアksesビリティ向上に寄与する計画を考える



3 「逸見の寺子屋」となるための拠点運営スキーム

教室 / 煙 + 居室からなる拠点建築が、子供の成長に寄与する寺子屋として機能する



教える・教えてもらうの関係性が築く寺子屋ネットワーク

逸見の谷戸の入口には浄土寺という長い歴史を持つ大きな寺が存在する。そこでは現在**逸見の魅力発信に貢献している**。この拠点建築はそうした活動の幅を広げる寺のアネックスとして計画する。郡心から出れる子育てファミリーたちに**逸見や逸見の歴史にまつわるイベント**、さらには創作体験などを行うことで町の魅力を知ってもらいながら、**子育てに寄り添う**ような新しい拠点建築のあり方を考える。

5 密集型地形に定める建築形態

今後必要となる一連の空き家改修をサポートする土台作りとなるような計画

